

## 「西郷札」－生活からの逃避－

評伝松本清張：昭和24年～26年

加島 巧

Matsumoto Seicho's *Saigo-Satsu*

Writing fiction as Escapism

A Critical Biography of Matsumoto Seicho, 1949 to 1951

KASHIMA Takumi

**Abstract**

Matsumoto Kiyoharu worked as a commercial artist for the newspaper *Asahi* from 1937 to 1957, after which he devoted himself to the writing from his early forties and he adopted the pseudonym Matsumoto Seicho. His earliest work *Saigo-Satsu* was written when he was still working at *The Asahi Shimbun* in Kokura, Kitakyushu City, Fukuoka Prefecture. The reason why he began writing his first novel *Saigo-Satsu* was that he wanted to escape from reality. It won the third prize of a contest in 1950 and it was nominated for the Naoki literary award. In this paper, the author describes the social description from 1949 to 1951 and analyzes his first three novels, *Saigo-Satsu*, *Kagero*, and *Kuruma-Yado*. According to the analysis, he is said to have already established his own style when he began writing novels.

## 1. 昭和24年（1949年）

昭和24年は戦後3度目の総選挙で幕を開ける。（民自264、民主69、社会48、共産35、国協14、労農7、その他29）この年は、国鉄三大ミステリー事件である下山事件（7月6日）・三鷹事件（7月15日）・松川事件（8月17日）が起こった。後に松本清張は昭和35年（1960年）の『文藝春秋』1月号から12月号まで「日本の黒い霧」を連載するが、その第一回目が「下山総裁謀殺論」（別題「下山国鉄総裁謀殺論」）である。

社会がまだ安定しない中で、明るい話題の一つは古橋広之進（1929-2009）の活躍である。8月にアメリカ・ロサンゼルスで開かれた全米水上選手権で、古橋広之進は400、800、1500メートル自由形に出場、すべてに世界新記録をマークして優勝するという快挙を成し遂げた。1947年のロンドンオリンピックには、日本は敗戦国のため参加できなかった。日本水連は日本選手権をロンドンオリンピックの水泳競技決勝と同日に開催した。その国内大会で古橋は400、1500メートル自由形でロンドンオリンピックの金メダリストの記録を上回り、当時の世界記録も上回った。ところが、「日本のプールは短いだろう」「日本の時計は遅くはないか」と海外の見る目は冷たかった。しかし、戦後初めて参加を許された国際競技で古橋らはその実力をいかんなく発揮、アメリカのマスコミからは「フジヤマのトビウオ」（*The Flying Fish of Fujiyama*）のニックネームをつけられ、敗戦のショックからまだ立ち直っていない多くの日本人に勇気と感動を与えた。

もう一つ明るいニュースが、古橋らの快挙の余韻も覚めぬ11月に飛び込んで来る。日本人初となる湯川秀樹(1907-1981)のノーベル賞受賞(物理学賞)である。京都帝国大学に進み、朝永振一郎(1906-1979)(1965年ノーベル物理学賞受賞)と出会った湯川は、1934年、重力、電磁力とは異なる新しい中間子の存在を発見し、翌年「素粒子の相互作用について」と題する論文にまとめた。戦争で中断した湯川理論だが、1947年にイギリスで二種類の中間子の存在が確認され、その一つが湯川の提案する粒子と判明した。

昭和20年10月に復員した清張が、生活の糧を得るために始めた箸の商いも、昭和23年の春で終わることとなった。清張39歳。朝日新聞西部本社広告部意匠係に勤務していた。この頃から観光ポスターコンクール応募の常連となる。その松本清張の昭和23、4年を『半生の記』<sup>1</sup>から覗いてみることにする。

私の生活は再び勤人だけのものとなった。単調で退屈な生活に逆戻りしたのだ。

——朝日新聞社についていえば、この間に重役の総退陣があった。重役も組合の意向で選ばれ、社長に長谷部忠氏が選任された。問題は部長クラスで、これも組合で選出するという話が行われていて、当時の部長はみんな暗い顔をしていた。が、それは実行されずに済んだ。

私の家は、佐賀から帰ったときに借りた元兵器廠職工住宅<sup>2</sup>の後で、そこから動くことができなかった。三畳、四畳半二間の家<sup>3</sup>に親子八人が雑居し、しかも私の内職の場所もそこにあけておかなければならなかった。そのころ長女は中学一年で、末の男の子は二歳だった。老人二人と子供四人とで全く足の踏み場がなかった。「箸の商売」を廃めてからの私のアルバイトは、もっぱら印刷屋の版下書きと、懸賞金目当てのポスター書きだった。半截<sup>はんさい</sup>くらいの画用紙を板に水貼りして、畳の上に置き、匍<sup>は</sup>らばって絵具を塗ったり、エアブラッシを噴きかけたりした。

(中略)

新聞もほぼ元通りになり、朝刊だけの四頁<sup>ページ</sup>建て<sup>4</sup>となった。私の仕事もようやく戦前なみに近くに回復された。しかし、それで心に弾みが生まれたわけではなかった。

新聞社の空気は一向に私を愉<sup>たの</sup>しませなかった。活発な動作で動き回っているのは出世を約束された学校での人たちだけだった。その人たちは、大阪からやってきては、二、三年くらい九州で腰かけの生活を送り、やがて大阪か東京に帰ってゆく。そのたびに一階級ずつ上がっていった。部長も、彼らだけを特別な目で見ていると考えるのは、あながち自分だけの偏見ではなかったと思う。

私も四十近くなっていた。

内職のないとき、麻雀<sup>マージャン</sup>でもするほかに心のやり場がなかった。また将棋を指して自分を忘れようとした。

(中略)

麻雀を終って、とぼとぼと自分の家に戻ってくる頃には、冬だとオリオン星座が天頂近く昇っている。ああ、こんなことではいけない。なんとかしなければ、という焦燥<sup>あせり</sup>とも後悔とも虚無感ともつかぬものが胃の腑<sup>ふ</sup>に重く落ちこんでくるのだった。

(中略)

砂を噛むような気持ちとか、灰色の境遇<sup>な</sup>だとか、使い馴<sup>な</sup>らされた形容詞はあるが、このよう

な自分を、そんな言葉では言い表せない。絶えずいらいらしながら、それでいて、その泥砂の中に好んで窒息したい絶望的な爽快さ、そんな身を虐むような気持が、絶えず私にあった。

家の近くに廃止になった炭鉱があった。あまり高くはないがボタ山がある。私は一番上の女の子を連れて、夜、その山の頂上にたち、星座の名前を教えた。山の端から昇ってくるサソリ座は赤い眼を輝かせ、図で見るよりは意外に大きな姿で昇ってくる。天頂には三角形に白鳥座と鷲座とがある。私は子供に「あれがデネブだ」「あっちがアルタイだ」と指さして教えたが、そんなことでもするより仕方がなく、私の心には星一つも見えなかった。

(中略)

本を一冊も読む気も起らなかった。読書もむなしとしか思えなかった。箒の商売で夜行を利用し、京阪や広島、佐賀間を往復したのも遠い過去になっていた。<sup>5</sup>

二十歳を過ぎた頃から清張は文学の興味からも離れていく。手に職をつける為には贅沢な文学どころでは無いと考えていた。菊池寛・芥川龍之介などの新理知派全盛の頃、そして、横光利一・川端康成も活躍を始め、プロレタリア文学が興隆する大正末期から昭和初期の頃である。そうは言っても、気楽な意味では、小説を含めての読書を止めることはなかった。<sup>6</sup>

「週刊朝日」<sup>7</sup>が懸賞小説「百万人の小説」の募集を発表するのは昭和24年のことであった。物価は次のような様子であった。<sup>8</sup>

	国家公務員 上級初任給	週刊誌	コーヒー	映画	カレー	ガソリン (1ℓ) 乗用車保有台数
昭和24年	4,223円	15円	20円	40円	50円	23円 36,680台

## 2. 昭和25年(1950年)

昭和25年になる。『チャタレイ夫人の恋人』(Lady Chatterley's Lover, 1928) のことから書く。小山書店は4月20日に伊藤整<sup>9</sup>を訳者にD. H. ロレンス<sup>10</sup>の著書を発表する。出版後2カ月間の販売部数は上下2巻で15万部を超えた。これに対して、警視庁は、刑法第175条の「猥褻物頒布等」違反の容疑で6月26日に摘発することを決定する。引き続き7月8日にその本は発禁処分となった。訳者伊藤整と小山書店社長は起訴された。1957年に小山書店社長小山久二郎が罰金25万円、訳者伊藤整に罰金10万円、両名の有罪が確定することとなる。

7月2日には金閣寺が炎上する。放火の疑いで同寺子弟の見習い僧侶が逮捕される。この事件をテーマに三島由紀夫が『金閣寺』<sup>11</sup>を、水上勉が『五番町夕霧楼』<sup>12</sup>と『金閣炎上』<sup>13</sup>を書く。

6月25日に朝鮮戦争が勃発する。清張の住む小倉もその後方支援基地となった。今上天皇の家庭教師を勤めていたE. G. ヴァイニング夫人は『皇太子の窓』(Windows for the Crown Prince, 1952) という本を出した。皇太子の家庭教師になるために日本へ向けて旅立つ1946年(昭和21年)10月1日から帰国後の1951年(昭和26年)までのことが書かれてある。その第三十五章(最終章)は次のような不安な書き出しで始まる。

1950年（昭和二十五年）六月二十六日月曜日の朝刊で、私たちは初めて朝鮮戦争を知った。見出しを見た瞬間、私は過ぎ去った不吉な年月－日本の満州攻撃、ヒットラーのラインランド侵入、ムッソリーニのエチオピア戦争、ミュンヘン會談などの見出しを見たときと同じように、とんだことが起ってしまったと暗い気分になった。私はすぐにこれが第三次大戦の口火を切ることになるのではないかと思った。

私の日課はいつもと変わらなかった。授業の合間々々に、ニュースに最新の注意をはらった。いつもの短い軍のニュース報道以外には、特別放送も解説もなかった。国際連合の安全保障理事会が招集され、北鮮軍に対して、砲火を収めて、すでに三十八度線を突破して幾つかの街を占領していた侵入群を撤収することを命令した。朝鮮にいる千七百人のアメリカ人は引揚げることになり、それとともに、飛行機の援護の下に糧食や武器が南鮮へ送られることになった。<sup>14</sup>

時と場所を6月25日から7月11日の小倉に移す。暑い夏であった。小倉の街には祇園太鼓の音が響いていた。戦後初めて再開される祇園祭りの前日で街は賑わっていた。その夜、松本清張が後に『黒地の絵』<sup>15</sup>で描いた黒人兵脱走事件が起こる。次に引用するものは、毎日新聞社が昭和四十年に出版した『激動二十年 福岡県の戦後史』<sup>16</sup>からであるが、松本清張の『黒地の絵』を彷彿させる記事となっている。

「よいか、ミスター・ヨネイマ、やつらが少しでも手をおろそうとしたら撃ち殺してしまえ。遠慮したらやられるぞ」MP曹長、マグリアノの鋭い声が飛んだ。目の前のたんぼの中から手を上げた黒人兵が六人、ヌッと立ち上がった。足元には投げだされた自動小銃が二丁。小倉署涉外係巡査、米今敏明（同署刑事課）はジープに備え付けられた機関砲に手をかけながら、背筋に冷たい汗を感じた。マグリアノはすばやく近づくと、六人の腰からピストルと手りゅう弾を抜きとった。息づまるような武装解除の一瞬一ゆだなく身構えながら米今は、黒人兵の目に悲しみと憎悪の色がみなぎっているのをみた。

二十五年七月十一日、小倉の街筋は、戦後はじめて再開される祇園祭りの前日でにぎわい、ドドン・ドン・ドン・・・独特の調子で打ち鳴らされる太鼓の音は、市民に“生活”が戻ってきたことを感じさせたが、その太鼓のリズムを別の感情で、からだで聞いていたのが、二日前、岐阜から城野の米軍補給基地（現・自衛隊補給処）<sup>17</sup>に到着した板二十五師団二十四連隊の黒人部隊だった。朝鮮では国連軍が北鮮軍に押しまくられて大田も陥落、後退をつづけていた。黒人部隊は、その不利な戦況の最前線に投入されることになっていたのだ。

同日午後五時ごろ、ちかくの三郎丸、富士本酒店にのっそり二人の黒人兵がはいってきた。「サケクダサイ」掃除をしていた主婦の元子が奥に酒を取りに行こうとしたとき、二人は陳列用に水を入れて飾っていた見本の一升ビンをつかむと、表に走り去った。これは序の口だった。事件は六時すぎにおこった。城野基地西側の有刺鉄線のサクを切り破って約二百人の黒人兵が集団で脱走したのだ。全員、完全武装していた。これを約二百メートル離れたところから目撃した牧場経営、木山賢一は「まるで黒いサルが集団が走り抜けるようだった」という。酒屋は軒並みに荒らされ、酔っぱらった黒人兵は本能をむきだしにして足立、足原、三郎丸、熊本町・・・一帯の民家に襲いかかった。

米軍の非常線が張られたのは脱走してから約二時間後だった。三萩野―北方の電車通りを中心に機関砲、機関銃、自動小銃で武装したMPのジープが散り、出動を要請された小倉署員も支給されたばかりのSWレンコン式ピストルを腰に、交通しゃ断、警戒に当たった。

「足原、城野方面に帰る人は危険ですからもよりの派出所に状況を聞いてください」新聞社のニュースカーが急を告げて走り回ったが、何ごとがおこったかは知らされなかった。鎮圧は二日間にわたってつづき、十二日夕方、首に銃、右手にクツ、左手にウィスキーのからピンを下げた最後の一人が小文字通りで逮捕されて、アラシはようやく去った。市民の被害は、米軍側に報告されてものだけでも暴行、涉外、強盗、窃盗など七十数件、しかし乱暴された婦人については、ひたかくしにされた場合が多く、真相はナゾのままだ。同部隊は二日後に出発、北鮮で全滅したと伝えられた。

MP司令部主席通訳だった永井義之（小倉区）は「敗北の色が濃い戦場に駆り出されるという気持、米軍内部にあった黒人差別の空気に対する反発、そうしたふんまんがうっせきしていたとき、町から聞こえてきた祇園太鼓の音が彼らの郷愁をかきたてたのでは・・・」といている。十三日「市民に遺憾な事件があったが、ひきつづき友好関係を保ってほしい」というキャンプ司令部、M. ロバート大佐の談話が発表され、黒人兵の感情をやわらげるために、同キャンプで初めてMP副官に黒人のタケット中尉が登用されたのは約一ヶ月後のことだった。

米軍の城野キャンプは松本清張が当時住んでいた元兵器廠職工住宅のすぐ横であった。その日、七月十一日<sup>18</sup>の晩、新聞社を出たのは夜の八時ごろであった。普段は鉄道線路を歩いて帰るのだが、夜は電車で三郎丸まで行き、そこから家まで一キロ半ぐらいを歩いて帰った。米軍補給廠裏側の道を通ったのは九時すぎのことだった。日ごろと少しも変わったところがなかった。盲啞学校<sup>19</sup>が補給廠との境に立っている。清張はその時、兵隊の一人とも出会わなかった。翌日、朝になり、昨夜黒人兵が脱走したことを知る。<sup>20</sup>町では祇園祭は開かれており、祭の終わりと共にこの事件も終結することとなる。その頃の清張は「週刊朝日」が6月に募集を発表した「百万人の小説」のことを考えていた。

「西郷札」で応募することになるのだが、応募理由の一つは当時としては最高の一等三十万円という賞金に魅せられたのかもしれない。<sup>21</sup>何気なく広げた富山房の百科事典の「さいごうさつ」という項目を見たことがヒントになった。<sup>22</sup>

清張は書きはじめた。締め切りまで二十日くらいしかなかった。当時住んでいた黒原営団でウチワを片手に蚊を追いながらの執筆だった。<sup>23</sup>原稿が少しずつ完成する度に、若い同僚を外に連れ出し、原稿を朗読して聞かせた。<sup>24</sup>原稿を提出した時は、「百万人の小説」の締め切りを一週間過ぎていた。しかし、「原稿を入れた風呂敷包が盗まれた」という理由を付けて応募したところ、編集部は受け付けた。<sup>25</sup>幸運だった。松本清張はなんのために西郷札を書いたのか。度々外に連れ出された<sup>26</sup>朝日新聞の親しい同僚が清張から答えを聞き出している。

「賞金が欲しかったと言わせたんだらう。<sup>27</sup>だが、それは儂い希望だった。僕を夢中にさせたのは、生活からの逃避だった。小説を書いている間は、いやな現実も逃げてくれたからね。」<sup>28</sup>

そう言いながら、また、大学ノートを慈しむように捲った。

「田村君、考えてみろよ。僕らの現実、いやなことや苦しいことばかりじゃないか。会社の

中だって、組織に胡坐をかいた大して働かん奴が高給をくらって偉くなっていくじゃないか。僕は彼らとけんかせずにはおれないんだが、あとは、いつも後悔してるんだよ」

自虐とも侘しさともとれる笑みがあった。ずんぐりタイプに似ず、繊細な彼の声はよく通った。

「僕には便宜主義やご都合主義は駄目なんだよ。組織には弱い男だよな」

強気一点張りに思っていた松本さんの、本音の一角に触れた気がした。なにげなしに松本さんの指を見たとき、五本の指が、まるで女性のように細く見えて意外だった。

「だがな、田村君、僕は必ず文壇に出てみせるよ。ほんとやで」<sup>29</sup>

引用文の最後の部分は、常々、小説家を志望したのではないと言っていたことと大いに矛盾する発言として注目に値する。<sup>30</sup> このことは、芥川賞を受賞した「或る『小倉日記』伝」について書く昭和 27 年で再度取り上げることとする。

12 月に応募作「西郷札」が三等に入選する。賞金は十万円。特選に深安地平、優賞に五味川淳（後の五味川純平）と森富子、入選は松本清張と南条道之助（後の南条範夫）と埴輪史郎であった。<sup>31</sup> 現実から逃避するために小説を書いていたのだが、受賞を知らせる新聞記事は、受賞を喜ぶ清張をあふれるような情熱の持ち主と表現している。<sup>32</sup> その記事を見ると、「ああ、あのときはもう四十歳だったのか」と清張は思い出す。<sup>33</sup> 七人の家族を支えなければならない状況、前途に希望のない状況に大きな変化はなかった。

池田隼人蔵相が「貧乏人は麦を食え」と発言したのがこの年の 12 月 7 日。昭和 25 年の物価は次の通りであった。

	国家公務員 上級初任給	週刊誌	コーヒー	映画	カレー	ガソリン (1ℓ) 乗用車保有台数
昭和 24 年	4,223 円	15 円	20 円	40 円	50 円	17.7 円 31,480 台
昭和 25 年	4,223 円	15 円	30 円	40 円	50 円	23 円 36,680 台

### 3 - 1. 昭和 26 年 (1951 年)

昭和 26 年、この年の元日の新聞の一面を占めた記事は、連合軍総司令官マッカーサーの「日本国民へ」であった。4 月 11 日には朝鮮戦争のやり方をめぐり、トルーマン大統領から解任され、4 月 16 日に帰国する。前年の 6 月 25 日に始まった朝鮮戦争も 7 月 10 日には休戦協議が開始された。民間ラジオの正式放送が始まり、民間航空も東京－福岡間で運行を開始した年でもある。黒沢明監督が映画「羅生門」でベネチア映画祭グランプリを受賞した。

「西郷札」がこの年の上半期の第二十五回直木賞候補作になる。いよいよ作家松本清張がその活動を開始する。

## 3-1-2. 西郷札の書き出し

去年の春、私のいる新聞社では『九州二千年文化史展』を企画した。秋には開催予定で早くからその準備にかかっていた。私は一カ月間つづけて九州中をかけ廻り、大学の図書館や寺や古社、旧家をたずね出品資料の蒐集につとめた。成績はよい方で、長い出張が終わる頃には大体の目鼻をつけて帰ってきた。出品の中には国宝もあるし、いわゆる門外不出のかけ替えのない重要品もあるので、その取扱いや輸送に前もって万全の方法を講じねばならなかった。その計画のため概ね出品の決まったところで品目のあらましをリストに作ってみた。すると出来上がったその表を一瞥しただけで、予期以上の成果ということが分った。殊に切支丹物では今までにない逸品が見事にならんだ。「おい、これは何だ、西郷札とは何だ？」と突然若い部員がリストを見ていった。四、五人の目がそれを覗き込むと、そこには、

一、西郷札 二十点

一、覚書 一点

としてあった。私にもそれは分からなかった。

「誰だい、これを扱ったものは？」

とたずねると、リストを作った男が書類綴りを出して繰っていたが、

「あ、それは宮崎<sup>みやざき</sup>の支局からまわったものです。先方から出品を申しこんだことになっています。と言った。

綴込みの手紙を見ると支局長のE君からで、「宮崎<sup>みやざき</sup>県佐土原町、田中謙三<sup>たなかけんぞう</sup>氏より申込み委託を受く。近日発送の予定」としてある。

それにしてもこの『西郷札』というのがわからなかった。名称から見て西郷隆盛に関係あるらしいことはわかるがそれ以上の知識は誰にもなかった。なかには西郷を崇拝する地方の一種の信仰札だろうと言う者もいた。しかし出品を申しこむくらいだからもっと史的価値のあるものだろうと反対意見を出す者もいる。ついに誰かが給仕を走らせて調査部から百科辞典をかりてこさせた。富山房版<sup>ふざんぼう</sup>の同辞典には次のとおり出ている。

## 3-1-3. 「西郷札」について

書き出しは新聞社が企画する展覧会に出品される品目の中に「西郷札」が入っているところから始まるが、話の中心は「覚書」に書かれている内容である。それは菊版ぐらいの大きさだが三百枚ぐらいの和紙を二つに折って綴じ、毛筆で細かい字がぎっしりと書きこんであった。それは出品を依頼した田中氏の祖父の知人、日向市佐土原土族樋村雄吾が誌るしたものであった。

宮崎県佐土原に生まれた雄吾は、幼い頃母を亡くす。父・喜右衛門は後妻を娶るが、その連れ子・季乃<sup>すえの</sup>と雄吾の間にほのかな恋が芽生える。その頃、鹿児島では西南戦争が勃発。西郷隆盛率いる薩摩軍に加わった雄吾は、西郷札発行に携わるが、やがて敗戦。負傷した雄吾は可愛岳突破の途中で気を失うも、親切な庄屋の甚平に助けられ一命を取り留める。しかし、全快して郷里に戻った時には父は既に亡く、家も焼け、継母と季乃は行方知れずになっていた。全てを無くした雄吾は、東京に出て、車夫として生活し始める。そんなある日、雄吾は高級官員の屋敷内で偶然、季乃と再会する。季乃は

官吏塚村圭太郎と結婚していた。西郷札の回収と官吏塚村の策略に巻き込まれる雄吾。雄吾は指名手配されていた。雄吾の取る道は？季乃の勤める逃亡か、それとも官憲に自首するのか。もうひとつ最後の策が残っていた。覚書はここで終る。最後の策とは一体なんだろうか？八十枚の原稿を仕上げようとしていて、七十枚になっても結末に近づいてこないという締切と枚数に追われて、芥川龍之介の『開化の良人』<sup>34</sup>にもあるようなので、解決は文字にせず、読者の想像に託してしまった、と清張は言う。<sup>35</sup>

評論家平野謙は新潮文庫版の解説で、「西郷札」を、何度読み返しても面白いと評している。平野はさらに、作者清張が資料をよく勉強し、マスターしていると同時に、すでにその構成力、描写力においてもほぼ完成したのを持っていたことが分かると述べているが、<sup>36</sup>それは読者の誰もが思う事であろう。平野の言葉を借りれば、清張が既に身に着けていたものとは、大人の<sup>がんしょう</sup>翫賞にたえる文学上のポピュラリティである。明治十年の西南戦争の際に薩軍が軍票を発行し、人々がそれを西郷札と呼んだ確かな史実を元に物語を構成したことが、全て清張の想像力なのか、それとも、似通った物語を元にしたのか、それについての清張の言及は無い。しかし、車夫になった主人公が義妹とめぐり合い、その夫の官吏に謀られる筋書きは作者の想像力であると平野謙は言う。「西郷札」が直木賞候補になったことは、清張が小説家としての技量を既に身に着けていたという平野の判断の正しさを証明している。

西郷札の筋書き、特に主人公が義妹と出会う後半が樋口一葉<sup>37</sup>の「十三夜」<sup>38</sup>と似ているという指摘がある。また、徳富蘆花<sup>39</sup>の「灰塵」<sup>40</sup>との類似性も指摘されている。<sup>41</sup>

「十三夜」では、高級官吏原田勇の元に嫁いだ貧しい家の美貌の娘である「お関」が主人公である。弟も良人原田の縁で働いている。身分違いの結婚であったことは、長男の太郎が生まれてから生じる。冷たい仕打ちが続き、結婚後7年目に子供を置いて家を出ようと実家に戻る。良人の勇は最近では、家を空けることも多い。両親に諭され、原田の元に帰る決意をするところまでが前半。後半はお関が人力車に乗り、帰るところから始まる。車夫は突然、「代は入りませぬからお下りになすつて。」と言う。車夫は幼馴染の高坂録之助だった。煙草屋の録之助は以前お関と相思相愛で、お関も行く行くはあの店のあそこに座って新聞を見ながら商いをする身を想像していた。車夫に身を落とした録之助も結婚をしたが、妻と女の子は実家へ戻ったまま音信不通であった。その子供も病気で死んだということであった。今は、浅草の安宿の二階に住んで車夫として働いている。お関と録之助は十三夜の夜に出会い、また別れて行く。村田の二階にも、原田の家の奥にも、それぞれ憂うことがあるのだということとで物語は終わる。

「灰塵」は、豊前の国中津に上田久吾を当主とする旧家が舞台で、そこに3人の息子覚、猛、茂がいた。両親から一番愛されていた三人兄弟の末っ子の茂は、西南戦争に参加する。園部という家にはお菊という娘がいた。茂とお菊は相思相愛の仲。西南戦争に参加して茂が不在の間に上田家の跡目を猛が相続する話が起こり、猛はお菊を嫁にするように求める。茂は戦いで、負傷するが、その傷も癒えて、郷里に帰ったところを、陰険な二番目の兄猛に、賊軍に加わったことを理由に切腹を迫られて死ぬ。半狂乱になった母親が行燈を倒したため火事となり、三百年の旧家も灰塵に帰した。また、猛に結婚を迫られ悩んでいたお菊は、幼いころから愛していた茂の死に衝撃を受けて、茂の墓で首を吊って死ぬ。お菊は茂の墓に合葬される。周囲の非難を受けた猛は田畑を処分しやがて消息を絶ってしまう。兄の覚と狂気の母は親類に引き取られるという筋書きである。

「十三夜」と「西郷札」の類似点を森本稜は、3点、もう一方の「灰塵」と「西郷札」の類似点を、7点を指摘する。<sup>42</sup>



## 「十三夜」と「西郷札」の類似点

1. 非情な男の妻となっている女性が、偶然にも、むかし思いを寄せた男の引く車に乗ること。  
 (「西郷札」では、偶然に乗り合わせた男の家で再開するという設定に変換されているが。) しかも、その結婚は、男の側が一方的に見初めて、強引に結婚を成立させたものであること。
2. かつてはかない相思相愛だった(ただし、はっきりと恋情を確かめ合ったわけではない)男が今は零落して車夫になっていること。
3. 車上のひとときが、ふたりにとって貴重な逢瀬の時間であり、やがてふたりは別の力によって、別れなければならないこと。

## 「灰燼」と「西郷札」の類似点

1. 九州の士族(あるいは郷土)の父に鐘愛された息子が、純粹さから血気にはやって西南戦争に馳せ参じたことから悲劇が始まること。敗戦をつぶさに経験し、さらに悲惨な運命に陥ること。
2. 数ある激戦地のうち、両作品とも可愛岳越えで気を失って西郷軍から脱落したとしていること。
3. 戦後、時をおいてかろうじて生還したところ、生家の状況が一変していること。
4. 敗戦の結果、幼いころから心を通わせあってきた縁戚の女性と引き裂かれたこと。
5. その女性をめぐって、権力的、優越的な立場にある男が、嫉妬から(「灰燼」では「悪くみ、嫉くみて、然も穩忍容易に鋒鏑を露さゞりける猛」とある)、主人公を奸智(に)をめぐらすことによって破滅へ追い込むこと。
6. 生家が消滅したあと、「灰燼」では兄猛が、「西郷札」では雄吾が、土地を捨て、上京して再起をはかることとなり、新しい舞台として東京が示唆されていること。
7. この闘争の勝者である兄(「西郷札」では、義弟にあたる塚村)もまた、永久の勝利を得ることができないまま、作品の最後で、歴史の波間に消えたときされていること。

このように詳細な指摘がしてあるにも関わらず、筆者は清張の「西郷札」が樋口一葉や徳富蘆花と似ているとは思えない。<sup>43</sup> 類似点を指摘した森本稜も、「灰燼」から多くのものを吸収しながら清張自身の発想を加えることにより「西郷札」が成立したという視点からその論考を進めている。<sup>44</sup> それは、平野謙の指摘通り清張の想像力であろう。権田萬治は、清張の「西郷札」で既に、彼に特徴的な小説の書き方が見えていると言ひ、それを次の6点にまとめている。<sup>45</sup>

1. ある事柄から作品になりそうだというヒントを得る(富山房の百科事典でみた「西郷札」が小説になるのではないかと考えた)<sup>46</sup>
2. その題材の資料を調べる(『明治編年史』などでメモを取る)
3. 関連する事柄、人、舞台などを現地取材する(西郷札の発行地など一部は取材したらしい<sup>47</sup>)
4. 基本的な筋立てを練り上げる

5. 小説的としての構成を工夫する（日向佐土原の古文書のような体裁にしてあるが、これは小説的な構成にするための創作）
6. 執筆する

加納重文は「西郷札」の構成を分類し、それを次の 5 点にまとめている。そして、1. の項目は、小説の形式の問題、2. の項目は、環境の問題、そして、3. 4. 5. は人間把握の問題とし、この 3 つの問題が清張文学に固有な認識であるとし、それが既に清張の処女作に表れているとしている。<sup>48</sup> この加納の指摘は、新潮文庫版の平野の解説の信頼性を高めるものとなる。短編では 1. の形式が省略される場合も多い。

1. 誰かの導きによって、小説の世界が始まるという形式・・・形式
  2. 確かな歴史事実が背景にあるという認識態度・・・・・・・・・・環境
  3. 人妻への恋慕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
  4. 妻への疑惑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
  5. 人間の物欲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
- } 人間把握

清張自身は、小説の書き方については次 6 点にまとめている。<sup>49</sup>

1. 筋：小説は、やはり読んでおもしろくなければならないと思うから、私はプロットにできるだけ物語性をもたそうとしている。
2. 取材：納得がいくまで聞く。
3. 視点：大体、短篇は一人の人間に焦点をおくようにしているのは、構造上、他の作家の場合と同じだが、いわゆる私小説系列のものは避けている。たとえ自分がそこにいても、ナマに近いかたちでは出さない。小説は虚構の形式と思うので、いかにも自分の姿を真実らしく見せかけている告白体は私の気持と合わないのである。自分の経験なり体験なりは、いくらでも他人を語る様式の中に持ちこめるし、そのほうが強く書けるように思われる。長篇の場合は、大体、短篇のように一つに決めた焦点を主流にし、副次的な視点をせいぜい二つくらい設定する。
4. 背景：小説の雰囲気をもり上げる何よりの要素であろう。ただし適合という点からすれば、必ずしもその舞台を小説のもつ主調色に合わせるとはかぎらない。
5. 文章：小説を書きはじめたころは、どういう文体にしていかわからなくて迷った。結局、平明で簡潔なものを志したが、これは中年で小説を書きはじめたためかもしれない。
6. 交換作業：極端な例でいうと、現代小説と歴史小説とを交互に進行して書いたほうがどちらにも新鮮さを感じて、自分の体質には向くようである。だれにでもすすめられる作法ではない。

「西郷札」は三等に入選した。そして、『週刊朝日 春季増刊号』（昭和 26 年 3 月 15 日）に当時の挿絵の第一人者岩田専太郎<sup>50</sup>の挿絵で掲載された。雑誌に掲載されたのは、他には特選の作品だけであった。直木賞候補にもなった。木々高太郎<sup>51</sup>に雑誌を送ると、次々に書くように勧め、発表誌がなければ紹介もするという励ましの手紙も貰う。これが縁となり、『三田文学』に「記憶」と「或

る『小倉日記』伝」が掲載され、後者は芥川賞を受賞することとなった。先に引用した吉田満は、どうしたら小説が書けるのかという問を清張にしているが、清張の答えは次のようなものであった。

「モームがね、若い作家志望者を集めて言ったそうだよ。読書すること、旅行すること、骨身惜しまず書くこと。とね」

モームの原書で英語を勉強していることから得た知識であろうと思った。

「だがね。モームは『ああ、もう少しで忘れるところだった。作家になるには才能がなければならぬ』と付けたしたそうだ」

(中略)

「田村君、さっきモームの話をしたけどな。モームも重大なことを忘れていると思うんだよ」

「ええ？それはなんですか」

「運だよ」<sup>52</sup>

清張は後に文学賞の選考委員も行ったが、その時の経験も踏まえてか、または、自分自身の受賞の時のことを考えてか、賞の受賞は運によるところが大きいと言う。あの時『西郷札』が入選しなかったら、いや、入選しても雑誌で活字にならなかつたら、清張は小説を続けて書いていくようなことはしなかつたであろうと書いている。<sup>53</sup> 作家山村美紗<sup>54</sup>は1973年に「ゆらぐ海溝」（「マラッカの海に消えた」に改題）で三度目の江戸川乱歩賞の最終候補に残った。松本清張はその賞の選考委員であったが、その時のエピソードは、松本清張の芥川賞受賞の感想と共に昭和27年の頁で述べることにする。

### 3-2-1. 「陽炎」『暁鐘』<sup>55</sup>1951年（昭和26年）10月10日発表

『暁鐘』は福岡県警察本部が編集する県警職員雑誌である。1946年の7月から発行されている。この作品は、1992年に『月刊はかた』の10月号に採録された。

### 3-2-2. 「陽炎」の書き出し

寛永十四年三月、筑前藩主黒田左衛門佐忠之は一年の出府を了えて歸國した。

一行が筑前領の黒崎に入ると誰の顔にも長途の旅を済ましてわが家の門をくぐつたような安堵と欣びとがみえた。固苦しい供行列も何となく浮立っていた。山野にはまだ櫻が残っていたし、霞がかゝつた國の春景色は人々の心を更に愉しくした。

三百石近習役西本四郎左衛門もやはり歸心に胸をときめかしている一人であつた。妻は二年前めとつたばかりで、去年一年は主君について出府したから夫婦の語らひは一年に過ぎなかつた。妻の多美は彼の氣に入つた女だし、今日の歸國のことは半年も前から彼は待つていた。

その日の夕刻、一行は歸城した。箱崎まで家老以下が出迎え、途中の沿道には領民にまじつて出府の留守をまもつた家族が包み切れぬ欣びをみせてうづくまつていた。實際、供の中にはそういう家族をみつけて、うれしそうにひそかな會釋あしやくを送る者も多數あつた。四郎左衛門も、もしやという思いで、目で搜したが、妻の姿をみつけることは出来なかつた。

四郎左衛門が解放されて、なつかしいわが屋敷に歸つたのは日が暮れてからだつたが、そこにも式臺に迎えに出るべき妻は姿を現わさなかつた。

——何かあつた。

と気づいたのは、思いがけなく叔父の西本甚太夫が座敷に腰をすえて酒を呑んでいることだつた。六十を超したこの隠居は、元氣で親類中のやかましやで通つてをり、長政公のお供をして幾多の陣に参加したのが自慢で、酔うと枯れた肌を出して古疵を見せる癖があつた。日頃めつたに自分からくる老人ではないのだ。

四郎左衛門は早くも胸が不安に鳴つた。

「やあ、歸つたか。長らく大儀であつた。」

と老人は甥の挨拶をうけた。舌の調子では可なり酒が入つていた。

「まあ、呑め。」

「はあ。」

二、三杯應酬があつたが、四郎左衛門の落付きのなさは消えない。

「四郎左衛門。」

と甚太夫はその心を測つたように云つた。

「は。」

「多美は居らんど。あれは俺が離縁した。」

### 3-2-3. 「陽炎」の構成

「陽炎」は五章からなる短篇である。400 字詰め原稿用紙 20 枚弱の分量である。

1.

主人公西本四郎左衛門が 1 年の江戸勤めから帰ってくるころから物語は始まる。帰宅すると、2 年前に結婚した妻の出迎えが無い。その代わり家に居たのは、叔父の西本甚太夫で、叔父は左衛門の妻多恵が遠縁の川村寅二郎と密通をしたので、離縁したこと、そして、女敵討<sup>56</sup>を行うように伝える。

2.

四郎左衛門は一向に暇乞いを主君に願ひ出る様子はない。二人の行方を知らせに来る者もいる。色々な噂話が陰口として広まる。叔父は激怒し、四郎左衛門を勘当する。今まで親しかった者も離れていく。そのような時に島原の乱が起り、黒田藩にも動員がかかり、西本四郎左衛門も従軍することとなった。ひさびさに晴々しい顔をしていた。

3.

兵糧攻めに苦しんだ宗徒たちが奇襲を行った。黒田藩は混乱に陥った。その戦いの中で、西本四郎左衛門の全身に憎悪が走った相手がいた。その相手の面影にあの川村寅二郎の面影を見たからである。四郎左衛門はこの戦いで殊勲を挙げた。その後の戦いでも見事な働きをした。

4.

原城の陥落で島原の乱は終り、黒田の軍勢は福岡に歸る。四郎左衛門の活躍で彼の評判は一変する。勘当を言い渡した叔父の上機嫌であった。離れて行った人たちも戻ってくる。しかし、中には、女敵

討はまだかと催促する者がいた。それに対し四郎左衛門は、「女敵討などは私事である。私事のために主君の側を長い間離れることは不忠の儀である。」という。この言葉でさらに四郎左衛門の人気はさらに高まることになるのだが、彼は以前と同じように憂鬱であった。

四郎左衛門が墓参りのために暇を願い出た。墓は中津にある。しかし、彼は中津に向かわず、小倉の漁村に向かった。そこに多美と寅二郎が住んでいたのだ。寅二郎は博打に耽り、多美は漁師の獲ってきた魚を城下で売り歩く生活であった。四郎左衛門は自分に叛いた民を憐れに思い、始めから討とうなどとは考えていなかった。妻の出奔以来満たされる心。戦での活躍も気を紛らわすためであった。

5.

四郎左衛門は二人の家を覗いてみた。向うから歩いてくる四、五人の漁師の女房達の中に多美がいた。見違えるほどやつれていた。その肩には不幸の影が重くかぶさっていた。四郎左衛門は通りがかりの男に包を多美に届けるように頼んだ。包の中には、金だけでなく彼がかつて買い与えた櫛も入れていた。「とどけてきました。びっくりしていましたよ。」という男のことばに、四郎左衛門は頷いて、口に微笑を浮かべたが、眼には涙がでていた。彼はしばらくその場にうずくまっていた。四郎左衛門の肩からは陽炎がゆれていた。さっきから土地の女房らしい女が、離れた場所に立って、四郎左衛門の方を見ていた。

### 3-2-4. 「陽炎」について

「陽炎」は幻の作品である。現在目にすることはなかなか出来ない。約7200字、400字詰め原稿用紙で18枚の短篇であるが、書き出しの第1章から読者を驚かす状況設定がある。最初の状況に島原の乱を絡めて物語を進めている。執筆を依頼した所が福岡県警の機関誌であることから、黒田藩、そして、多美と寅二郎の住む所が小倉の漁村。小説の背景も工夫している。しばらくその場にうずくまっている中村四郎左衛門。「罪をゆるす」ということの判断や中村四郎左衛門の生き方についての解釈は読者に委ねている。島原の乱という史実を物語に嵌め込み、小説家としての想像力を付け加える。

「西郷札」や次作の「くるま宿」と同じ手法で物語を作り上げている。

「仇討」は『日本書紀』第十四雄略記にある456年の記事が最古の敵討事件とされる。「曾我兄弟の仇討」、「鍵屋の辻の決闘」、「元禄赤穂事件」は「三大仇討」と呼ばれ、仇討は時代小説の定番の一つとなった。明治6年(1873年)に敵討禁止令が出る。松本清張が愛読したと言っている<sup>57</sup> 芥川龍之介や菊池寛も仇討物を書いているから、作品を書くきっかけになったと思われる史実や作品には事欠かなかったと考えられる。<sup>58</sup> 仇討物にはいくつかの類型があるが、その要素をうまく交えた短編に仕上げている。

### 3-3-1. 「くるま宿」

「西郷札」で作家デビューした清張は、「くるま宿」を書いた。西郷札は岩田専太郎が挿絵を描いた。そして、西郷札を読んだ大仏次郎<sup>59</sup>、火野葦平<sup>60</sup>、長谷川伸氏<sup>61</sup>などから手紙を貰った。「くるま宿」は、『富士』という雑誌に載った。やはり「西郷札」を読んだ編集長が、小倉にいる清張に手紙をくれたのである。

「陽炎」を『暁鐘』に載せた事情は分からないが、「くるま宿」は依頼原稿の第一号であった。<sup>62</sup>

### 3-3-2. 「くるま宿」の書き出し『富士』1951年（昭和26年）12月号

柳橋に近い“相模屋”という人力車の俵宿だった。明治九年のことである。人力車の発明は明治二年ごろということになっているが、そのころにはもう相当普及していた。はじめ俵の胴に時絵で、金時や、自雷也や、波を描いて美麗を競ったが、これはまもなく廃れて、そのころでは車体も紅無地で、蹴込みも深くなり、母衣（幌）の取付けも工夫されたい後代のものに近い体裁になっていた。古い統計によると、この年の人力車の数は全国で十三万六千七百六十二両と記載されている。その過半が東京であった。俵宿は帳場ともいい諸所にあったが、それぞれ屋号の名がついていた。車夫は夜“人力、何屋”という印入りの提灯を梶棒の先に吊って、ラッパもない時代のことで、「ごめん、ごめん」とかけ声をかけて走ったものである。

その明治九年の初秋のことだった。

“相模屋”の帳場に新しい顔の俵挽きが一人ふえた。彼は身体こそ頑丈そうだったが、年齢は老けていて、四十の上を二つ三つ越していた。

親方は清五郎という五十に近い男だったが、はじめ、この男をつれて紹介したのは知り合いの小間物屋で、近所の男だが病気の娘さんを抱えて困っているからぜひ働かせてくれ、という頼みごとだった。

### 3-3-3. 「くるま宿」の構成

1.

柳橋に近い“相模屋”という人力車の俵宿だった。主人は清五郎。明治九年の初秋。その当時、人力車は136,761両あり、東京にその過半があった。42, 3歳の俵引き、病気の娘と二人暮らしの吉兵衛が主人公。寡黙な男。酒・博打もやらない。

2.

料亭“竹卯”に賊がはいる。5人の賊を吉兵衛が一人で取り押さえる。

3.

竹卯の主人や越後屋の旦那が吉兵衛の世話を申し出るが、頑なに断る。明治十年西郷隆盛が兵を起こし、戦争となれば、百姓出の鎮台兵は西郷以下士族からなる薩軍の敵ではあるまい。

「なあ、おじさん。おまえさんも武家奉公の出だというが、どう思うかえ」

「士族はもうだめだよ」と、この男が珍しくはっきりした物のきめ方をした。

「へえ、だめかえ」

「ああだめだな。世の中に置き去りにされるばかりだ。昔の夢ばかり追っているから、だめなのだ。」

まあ、だんだん廃り者だな」

終いの語調は、どことなく自嘲の響きがあった。

4.

相模屋の辰三が抱えの車夫ともめ事を起こす。

辰三をやったのは小石川の久能孝敏という太政官出仕の屋敷の者であった。

5.

皆で押し掛けようとする時に、主人の清五郎が吉兵衛について行くよう云う。  
返事をする吉兵衛の顔色は、はじめて気重に見えた。

6.

久能孝敏は幕臣だったが、維新の際、そのまま朝臣となって、新政府に勤めていた。その屋敷に辰三たちが踏み込む。そこにいた梅岡というもと幕臣だった官員が出てくる。  
争いが起ころうとするときに吉兵衛がはじめて言葉を口から出す。

「あっ。先生」梅岡は小さく口の中で叫んだ。

7.

翌日久能孝敏が二、三の同僚と相模屋にくる。一連の無調法を詫び、吉兵衛の消息をたずねる。その日仕事を休んでいた吉兵衛の家を訪ねたが、既に娘とその家を去っていた。

「久野。先生はまだお嬢さんとお二人だ」

「うむ。お千恵さんにも久しく会わんなあ。俺が朝臣になったというので、先生が怒って、とうとう結婚は許されなかったが、あれきり先生父娘の遁世がはじまったのだ。お千恵さんの身体が弱いので、先生もご苦労される」と久能は沈んだ声で言った。

中で、ずばりと言った者がある。

「先生は立派だ」二三人が同じた。「うん、立派だ。立派だとも」

「旦那、あの吉兵衛というのはいったい、何なので」清五郎はきいた。

「あの方は、元直参六千八百石大目付山脇伯耆守やまわきほうしのかみとったお人だ。徳川氏に殉じて遁世されたが、今、零落されて、車夫までされたとはお傷しいかぎりだ」清五郎はときどき、吉兵衛が前に述懐した、「昔の夢をみている士族はだめだな。だんだん世の廃り者だ」という言葉を思いだしていた。

### 3-3-4. 「くるま宿」について

「くるま宿」は「西郷札」と同じく車夫の話である。元直参六千八百石大目付山脇伯耆守が、車夫となって毅然として生きていたという短篇である。没落士族という明治初期の歴史のなかで、人間の生き方というものを清張は描いた。吉兵衛の姿と言葉を通して清張は一つの人生という感情を示したかったのであろう。この時期、幕末から明治という波浪のなかで、翻弄される人生を描く、それが「西郷札」と「くるま宿」に共通する清張の態度であった。急激な社会変化に付いていけない人生、あえて付いていこうとしない人生は現在でもある。松本清張が読まれる理由がここにある。

「西郷札」が直木賞候補となったことは、清張に自信を与えた。当時若松市在住の火野葦平や小倉市在住の岩下俊作<sup>63</sup>と交流をするようになる。結局昭和26年は「西郷札」「陽炎」「くるま宿」の3篇を書いた。次に書く「記憶」（「火の記憶」に改題）と「或る『小倉日記』伝」はいずれも『三田文学』に掲載されることになり、この二つの作品はある意味では、松本清張にとって職業作家としてスタートするきっかけを作った記念碑的な作品となる。つまり、推理小説としての味わいを持った作品と芥川賞受賞作品の執筆である。それは昭和27年のことである。昭和26年の物価は以下の通りである。

	国家公務員 上級初任給	週刊誌	コーヒー	映画	カレー	ガソリン (1ℓ) 乗用車保有台数
昭和 24 年	4,223 円	15 円	20 円	40 円	50 円	17.7 円 31,480 台
昭和 25 年	4,223 円	15 円	30 円	40 円	50 円	23 円 36,680 台
昭和 26 年	1 月 5,500 円 12 月 6,500 円	25 円	30 円	80 円	80 円	24.5 円 48,309 台

## 註

- 1 松本清張『半生の記』昭和四一年河出書房新社 父峰太郎と母タニの出身地のことから昭和 25 年に小倉で起こった黒人兵の集団脱走までのことが書いてある。同様のエッセイは読売夕刊に 1976 年 6 月 16 日から 7 月 9 日にかけて「雑草の実」というタイトルで連載され、それは『自伝抄』として昭和五十二年に読売新聞社より出版されている。『自伝抄』のほうは昭和三十一年の朝日新聞退社までのことが書かれている。「火の記憶」(『小説公園』1953 年 10 月号)や「父系の指」(『新潮』1955 年 9 月号)「骨壺の風景」(『新潮』1980 年 2 月号)は清張の私小説と言ってよい。「川西電気出張所」(『文芸春秋』1974 年 1 月号)、「泥炭地」(『文学界』1989 年 3 月号)も同じ系譜に含まれよう。
- 2 小倉市黒原営団 374、現在の北九州市小倉北区黒住
- 3 六畳、四畳半、三畳の三間と藤井康栄・編「作品と完全年譜」(『松本清張の世界』文芸春秋一九九二年十月臨時増刊号 p.466)にはある。
- 4 松本清張「雑草の実」(『自伝抄』昭和五十二年に読売新聞社) p. 101 には八ページとある。
- 5 松本清張『半生の記』昭和四一年河出書房新社 pp. 188-196「泥砂」の頁。引用中に星座が出てくるが、星座は清張の色々な作品に彩りを添える特徴がある。
- 6 松本清張「雑草の実」(『自伝抄』昭和五十二年 読売新聞社) p. 102
- 7 1922 年(大正 11 年) 2 月創刊。1953 年頃の発行部数 30 万部。1954 年に 100 万部突破。1958 年新年号は 150 万部に達する。2010 年は 27 万部弱。http://ja.wikipedia.org による。(2010 年 9 月 4 日)
- 8 物価については次を参考にした。http://www.geocities.jp/showahistory/ (2010 年 9 月 3 日) http://homepage3.nifty.com/~sirakawa/Coin/J068.htm (2010 年 9 月 3 日) http://shouwashi.com/transition-gasoline.html (2010 年 9 月 15 日)
- 9 伊藤整 1905 年(明治 38 年)～1969 年(昭和 44 年)本名、伊藤整(ひとし)北海道生まれ。作家、東京工業大学教授。後に、伊藤整は 1961 年(昭和 36 年)に「「純」文学は存在し得るか」という『群像』11 月号に書いた論考で松本清張と関わることとなる。
- 10 David Herbert Lawrence (1885-1930) イギリスノッティンガムシャー出身の小説家・詩人。
- 11 『新潮』1956 年 1 月号から 10 月号に連載され、同年 10 月新潮社から刊行され、翌 1957 年に読売文学賞を受賞する。
- 12 1963 年発表
- 13 1979 年発表
- 14 E. G. ヴァイニング著 小泉一郎訳『皇太子の窓』文芸春秋社 昭和 28 年 p. 457  
 ヴァイニング夫人(Elizabeth Gray Vining) (1902-1999) は *Adam of the Road* (『神の子アダム』) で 1943 年に Newbery Medal を受賞している児童文学者でもある。引用文は表記を改めている部分もある。
- 15 松本清張『新潮』昭和三十三年三月号・四月号所収、光文社刊 昭和三十三年六月
- 16 『激動二十年 福岡県の戦後史』毎日新聞社西部本社 昭和四十年
- 17 現在は福岡県警察第二機動隊横の空き地、旧陸上自衛隊城野分屯地。
- 18 松本清張『半生の記』p.202 には六月十一日と書いてあるが、七月十一日の間違いである。
- 19 現在の県立小倉壱学校
- 20 松本清張：前掲書 pp. 202-203
- 21 松本清張松本清張「雑草の実」(『自伝抄』昭和五十二年 読売新聞社) pp. 102-103
- 22 松本清張『「西郷札」のころ』『実感的人生論』中公文庫 2004 年 pp. 115-116  
 松本清張『半生の記』あとがき p. 211
- 23 松本清張『「西郷札」のころ』『実感的人生論』中公文庫 p. 117
- 24 松本清張『半生の記』あとがき p. 212
- 25 吉田満『朝日新聞社時代の松本清張―学歴の壁を破った根性の人―』九州人文化の会 昭和 52 年 pp. 222
- 26 吉田満「小倉時代の武勇伝」『松本清張の世界』昭和 48 年 11 月文芸春秋臨時増刊号 pp. 103-104 (吉田満氏は当時朝日新聞西部本社広告部次長だった。)



- 27 松本清張『『西郷札』のころ』『実感的人生論』中公文庫 2004年 pp.117-118 には「実は賞金が欲しかったのである。特選はおぼつかないにしても、優賞の二十万円、せめて入選の十万円でももらえたらいいと思っていた。戦後のインフレ期に家族七人をかかえているとそんな願望が起こる。」とある。
- 28 松本清張は、森嶋外も家庭的な苦悶を逃避するためにあれだけの著作をしたと述べている。平野謙『平野謙対談集 文藝批評家の道』講談社 昭和五十年 pp. 219-220
- 29 吉田満『朝日新聞社時代の松本清張—学歴の壁を破った根性の人—』九州人文化の会 昭和52年 pp. 227-228
- 30 安間隆次「知らで叶うまじく…… 前半生の謎と不思議をめぐって」『松本清張研究』第4号 砂書房 1998年 pp. 90-91
- 31 【特選】現代小説「青春の旗」深安地平 【優賞】 1. ユーモア小説「家族裁判」五味川淳 2. 時代小説「桜土堤」森富子 【入選】 1. 時代小説「西郷札」松本清張 2. ユーモア小説「出べそ物語」南条道之助 3. 現代小説「死ねない男」埴輪史郎 (週刊朝日昭和25年12月24日号)
- 32 朝日新聞 昭和25年12月13日付
- 33 松本清張『『西郷札』のころ』『実感的人生論』中公文庫 2004年 p.119
- 34 大正八年発表。
- 35 松本清張『『西郷札』のころ』『実感的人生論』所収 中公文庫 2004年 p. 117
- 36 松本清張『西郷札』傑作短編集 (三) 昭和四十年 pp. 473-475
- 37 樋口一葉 1872年(明治5年)～1896年(明治29年) 東京生まれ、本名、夏子、戸籍名は奈津。
- 38 1895年(明治28年)12月、「文藝倶楽部」に発表。
- 39 徳富蘆花 1868年(明治元年)～1927年(昭和2年) 熊本生まれ、本名、徳富健次郎。
- 40 1900年(明治33年)3月3日～13日にかけて『国民新聞』に発表され、同年8月刊行の文集『自然と人生』の巻頭に収められた。
- 41 権田萬治『松本清張 時代の闇を見つめた作家』文芸春秋 2009年 pp 39-41  
森本穂「松本清張「西郷札」と歴史小説—徳富蘆花の影響と清張の方法—」賢明女子学院短期大学研究紀要(BEACON) No. 37 (2002) pp. 1-13
- 42 森本穂「前掲書」pp. 2-4
- 43 1959年に発表した「凶器」は『黒い画集』(第三集)の中の一編として出版されたが、これは、ロアルド・ダールの「おとなしい凶器」やアガサ・クリスティの「砂袋」を元に書いた。松本清張『『黒い画集』を終って』『黒い画集』第三集 光文社 昭和三十五年 pp. 306-307
- 44 森本穂「前掲書」p. 5
- 45 権田萬治「前掲書」p. 43
- 46 『天城越え』(昭和34年)の材料は「静岡県刑事資料」から採った。『黒い画集』第二集 光文社 昭和三十四年 p. 308
- 47 吉田満『朝日新聞社時代の松本清張—学歴の壁を破った根性の人—』九州人文化の会 昭和52年 p.227 には宮崎と鹿児島に取材に行ったとある。
- 48 加納重文『香椎からプロヴァンスへ—松本清張の文学—』新典社 2006年 pp. 13-15
- 49 松本清張「私の小説作法」(毎日新聞 昭和39年9月13日)『松本清張全集』34 文芸春秋 1974年 pp. 446-447
- 50 岩田専太郎(いわた せんたろう) 1901年～1974年 東京浅草生まれ。画家。連載小説の挿絵を数多く手がけ、昭和時代の挿絵の第一人者として知られる。1954年(昭和29年) 菊池寛賞受賞。
- 51 木々高太郎(きぎ たかたろう) 1897年～1969年 山梨県生まれ。慶応大学医学部卒業。1951年(昭和26年) 第四期『三田文学』編集委員。
- 52 吉田満『朝日新聞社時代の松本清張—学歴の壁を破った根性の人—』九州人文化の会 昭和52年 pp. 228-230
- 53 松本清張『『西郷札』のころ』『実感的人生論』所収 中公文庫 2004年 pp. 122-123
- 54 山村美紗 1931年(昭和9年)～1996年(平成8年)、京都生まれ。ミステリーの女王とか日本のアガサ・クリスティと言われた。シリーズ物として、「キャサリンシリーズ」「祇園舞子 小菊シリーズ」「葬儀屋 石原明子シリーズ」がある。推理作家西村京太郎との交際は有名。山村が急逝後、西村京太郎が彼女の未完の遺作『在原業平殺人事件』と『瀧野武行行列殺人事件』の2作品を完成させた。これは生前の約束による。
- 55 資料の確認、文献複写には、『月刊 九州王国』出版事業部チーフの諸江美佳さんにお世話になった。ここに記してお礼申し上げます。
- 56 神保文夫「北町奉行所「敵討帳」の一写本：寛文・延宝期」によれば、193件の内、28件が妻敵討である。名古屋大学法政論集 223、2008年 pp. 159-204
- 57 松本清張『半生の記』昭和四一年河出書房新社 pp. 45-46
- 58 芥川龍之介「或敵打の話」1920年(大正九年)五月一日発行の『雄弁』第一巻第五号掲載。菊池寛「仇討三態」『改造』大正十年六月。最近では、浅田次郎の「女敵打」(2003年) (『お腹召しませ』) 所収 中公文庫 2008年) も許す結末で作品を書いている。
- 59 大仏次郎 1897年(明治30年)～1973年(昭和48年) 神奈川県横浜市生まれ。本名野尻清彦(はるひこ)。代表作に『鞍馬天狗』シリーズがある。
- 60 火野葦平 1907年(明治40年)～1960年(昭和35年) 福岡県遠賀郡若松町(現北九州市若松区)で生まれる。本名、玉井勝則。昭和13年、『糞尿譚』で第6回芥川賞受賞。戦地で行われた受賞式には小林秀雄が赴いた。『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』のいわゆる「兵隊3部作」は300万部を超えるベストセラーとなった。
- 61 長谷川伸 1884年(明治17年)～1963年(昭和38年) 神奈川県横浜市生まれ。「股旅物」の創始者と言われる。

- 
- 62 松本清張「あとがき」『松本清張全集 35』文藝春秋社 1972 年 pp. 521-522
- 63 岩下俊作 1906 年（明治 39 年）～ 1980 年（昭和 55 年）福岡県小倉市（現北九州市小倉北区）で生まれる。代表作『富島松五郎伝』（『九州文学』1939 年 10 月号、『オール讀物』1940 年 6 月号）は第 11 回（1939 年下半年期）、12 回（1940 年上半期）の 2 度直木賞候補になる。この作品は後に『無法松の一生』として映画化された。「辰次と松」で第 13 回（1940 年下半年期）の直木賞候補となる。「西域記」で 1943 年上半期・第 17 回芥川賞候補になる。いずれも受賞には至らなかった。八幡製鉄所に勤務しながらの執筆活動であった。